
古い僕と新しい僕

空（くー）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古い僕と新しい僕

【Nコード】

N2393B

【作者名】

空くう

【あらすじ】

ある時、男の子はクラスメイトの葬式に参加した。その次の日から男の子の生活は変わってしまった。

それでも僕は学校に行っていた
学校に行かなければ将来危ないから？
それとも友達が欲しいから？

葬式が終わって何日か過ぎた

また変わらぬつまらない日々が始まっていた
あーうるさい。みんなうるさい。すべてがうるさい。

僕は静かに暮らしたいだけなんだ

そして僕は眠りについた。

《僕2》

朝起きると、僕の前を僕が走っていた

なんだろうこれは

夢かな

でも夢のわりにははっきりしていた
僕は上から走っている僕を見ていた
確かにあれは僕だ

でも、だったら僕はなんなんだろう
やがて僕は教室についた
そして

「みんな！おはよう！」

クラス中がざわついた

なんだ？僕はなにを言っている？

その下にいる僕は次々にクラスメイトにあいさつをし、そして世間
話さえも始めていた

当然クラス中が驚いていた

いままでクラスでまったく目立たなかった暗いやつがこんなにも明るく振る舞っているのだから……
僕はこうなりたかったのだろうか
その願望が爆発したのだろうか

僕はべつにどうでもよかった
今みんなの前にいるのは、僕だけど僕ではない
だからどうでもいい
好きにしてくれ

この方がいいのだろう
僕はそう思った
そして、明るくなった僕を見つめながら数日が過ぎたある日
僕の家に行ったその僕は
唐突に僕の方を向いてこう言った
「この体。私がもらってもいい？」

《僕3》

僕は
「いいよ」
と言った

「ありがとう」
と、その僕は言った

僕は考えなかった
だってこの数日を見て今の僕の方がいいのだろうと思っていたからだ
今の僕はクラスの人気者になっている

家でも家族と楽しくしゃべっている
どっちの僕の方が相応しいかは明らかに見えた
だから僕は体を譲った
今、僕が僕に戻ってもまたあの日々が始まるだけだ
ならこの方がいい

そして、その。新しい僕を、
僕は眺めていた

《私》

私には好きな人がいた

その人はクラスで目立たなかった
暗いイメージがあった

でも私は彼の優しさを見逃さなかった

彼は教室に入ってきた虫を殺したりしなかった
逃がしてあげていた

風でとんだプリントを拾ってあげていた

野良犬と戯れていた

掃除を真面目にやっていた

人をバカにしたりしなかった

そんな彼の些細な優しさを私は見ていた
いつしか彼を見るのが日課になっていた
そして、彼を好きになっていた

でも、

私は死んだ

よくは覚えていないけど、最後に私は車の前に立っていた気がする
私は死にきれなかった
好きな人に想いを伝えてなかったから
私はただ、彼のことだけを考えていた

.....

気が付けば

私は彼になっていた

《私2》

私には彼が見えていた

でも、考えてみれば

私は彼と話したことがなかったのだ
だから私は恥ずかしくなってしまうて、彼に話し掛けることができなかった

そこで私は思いついた

せっかく彼になったのだから私が彼のいいところをみんなに教えてあげよう！

そう思った

私は頑張った

始めはみんなも困惑していたが
数日で溶け込めるようになっていた

私はもっと頑張ろうと思った

彼のために

何よりも、こうしていれば私はずっと彼と一緒にいることができる

だから私は彼にこう言ったのだ
「この体。私がもらってもいい？」
と

私なら彼を明るくできる！

自信があつたからだ

そして彼は

「いいよ」

と、答えてくれた

私はうれしかった

これからも彼の力になれるのだと
そう思った

そして私はさらに明るく頑張った

《僕4》

また数日がたった

あいからわず新しい僕は人気者だった
僕では考えられなかった

そこにいるのはもはや僕ではなかった
ではどうして僕はまだいるのだろう
それがわからなかった

古い僕はもう必要ないはずなのに……………

ある日、新しい僕が僕に言ってきた
「私ね。ずっとあなたのことが好きだったの」

僕には何を言っているのかわからなかった
理解できなかった

そのあとの新しい僕の話によると、この間の葬式の女の子だと言う
ことがわかった

だけど僕には名前がわからなかった
もともとクラスに興味がなかったからだ

彼女は少し残念がっていた

そしてその日から僕達は会話をするようになった

《私3》

私には言わなければならないことがあった

私は彼に私の想いを告げた

彼は理解してないようだった

だから私が何者なのかを伝えた

彼は私の顔しか覚えていないと言った

私は少し残念だったが

それだけでうれしかった

その日から私達は会話をするようになった

私はその時間が幸せだった

《僕5》

また数日がたった

僕は会話をすることしかできなかった
自分の体に入れなかった

それでも僕はそんなに残念ではなかった

ずっとこのままでいけたらいい

そう思っていた

しかし

それは続かなかった

ああ、そうか

四十九日か……………

僕はどうすればいいのだろう

いまさら自分の体に戻ったとしても何をすればいいのかわからなかった

僕はとたんに恐くなった

行かないでくれ、行かないでくれ!!

僕を一人にしないで!

「私だって嫌だよ! あなたと離れたくない! でも、どうしようもないんだよ……………」

だからって…………僕にどうしろって言うんだよ

僕は臆病者だ

現実から逃げていただけだ

そんな僕にどうしろと…………

「大丈夫。あなたならできる。私のことを見てきたあなたならできる! 自分を信じて。私を信じて!」

いつのまにか僕は自分の体に戻っていた
もうこの現実からは逃げられなかった

僕は泣いていた

僕は気付いた

彼女のことを好きだと

だから僕は言った

「僕は君のことが好きだ!!」

そこに彼女はいなかった

《今の僕》

人はすぐには変わらない

結局、残ったのは僕だった

この結果いいのかはわからないけど
だけど僕は少しずつ変わろうと思う
彼女の残した

この道にのって

そして僕は教室に入っそう言った

「みんな!おはよう!」

(後書き)

『。』が殆ど無いので読みにくいかもしれませんね。初めて書いた短篇なので、批判や感想を正直に言ってくださると嬉しいですよ。それでは読んでいただきありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393b/>

古い僕と新しい僕

2010年11月25日02時42分発行